sousei akita

曹青秋田

秋田名「佛」 ～15教区・龍泉寺（岡部事務局長師寮寺）の佛様～

会長・事務局長 インタビュー

この前例の無い二年間を振り返って

赤石会長

曹青に長く関わり、会長になってみて、一会員・一役員とは違う重みの中、先頭に立ち事を進めるということの大変さを改めて痛感しました。その中で計画していたことが出来なくなった、或いは皆様が楽しみにしていた大きな行事が開催できなくなったことは、今でも残念だったと思っています。しかしその大変な中でも、執行部役員はじめ、周りの皆様の支えがあって、今できることがきちんと行えたのではないかなと思っています。改めて当初自分が計画していた書類を見ましたが、皆さんのお知恵のおかげで、もっと素晴らしい行事が開催できたと思いますし、運営の危機にあっても新しい取り組みも行えたのではないかなと思っております。

岡部事務局長

会長が事務局を経験済み、更に各部の皆様も以前から秋曹青の活動に深く関わっておられた方が多く、事務局としては大変楽をさせて頂いた二年でした。今期は会長以下、昨秋開催予定の東北地方集会秋田大会を成功させることを念頭に置き、活動して参りました。今年三月には東日本大震災から十年、初年度から何度も会議を重ねてきましたが、昨年新型コロナウイルス感染症拡大の中、参加者の健康と安全を考えて中止となりました。極めて妥当な判断と思いますが、残念な気持ちは今でもあります。コロナ禍の影響もあってオンライン会議を多く行いました。参加者の場所と時間の制約が大幅に軽減され、これからは大変有効なツールだと考えております。

昨年より激変する世界の中曹青の役割をどう考えているか

赤石会長

激変する世の中だからこそ、曹青という集まり・活動はとても重要だと思っています。特に若い宗侶が広く社会に出て活動するということは、一般の皆様の目に大きな印象を持って映ると思いますし、そのことで仏教界全体の印象を良きものにする、そういう活動こそ大事だと思っています。我々自身にとりましても、曹青は学ぶ場・研鑽の場・会員相互が連携しあい、互いに知り合える大事な場だと思っています。今後とも会の存在は重要ですし、その時々に合わせた連携の仕方・取り組み方を模索しつつ、活動していけたらと考えております。

岡部事務局長

コロナウイルスによって亡くなった方・闘病中の方・後遺症がある方・心が傷ついた方・・・沢山いらっしゃいます。収束後は、秋曹青として傾聴や茶話会等の機会を作って頂ければありがたいことだと思っております。複雑で深刻な問題が多くなる社会において、他宗派や他宗教がこれまで以上に協力し合える環境を築ける様、曹青が積極的に活動して頂けました。すばらしいと思います。

この二年を踏まえて次期会長・事務局長へアドバイス

赤石会長

青年会はその時々の会長が、社会情勢を踏まえて、学びたいことを学べる団体だと思いますし、青年会員同士の親睦を深めあえる、お互いを知り合える、繋がりを作れる、とても良い会だと思っております。次期会長さんにおかれましても、こういう場を常に保てるように会を運営してもらいたいです。

岡部事務局長

幸い諸先輩のおかげで、過去の秋曹青の事業活動がデータとし

てストックされております。そちらを参考に、事務局の今後の活動に役立てて頂けたらと思います。引き継いだ時から今の会員数は十名減少しております。今後も程度の違いこそあれ、減少は続くかと思います。SNSの発達や皆様の御理解のおかげで、会議や事務通信にかかる時間と経費を、かなり抑えることが可能となりました。次期事務局長には、前例にとらわれずSNSなどを多用し、会員の皆様が参加・対応しやすい環境を作って頂けたらと考えております。

入会当時と現在を比べて変わったことは？

赤石会長

世代の違いを感じます。私が二十代のころは今の五十代六十代の諸先輩方が活躍した時期です。その当時の視点から、今私が退会間近の年齢になって入ってこられる二十代の皆さんを見ていれば、物の考え方・置かれている環境が違いますから、それによる差を大きく感じています。また、入会から現在までの間にも色々な出来事がありました。社会の変化の中で、青年僧侶に求められることも変わってきています。我々にどんな事ができるか模索しつつ、会の研修の内容も少しづつ変わってきたと思います。以前なら声明なり祖録の講義等ありましたが、必須科目以外にも目を向けるようになったのも時代の流れなのかなと思います。

岡部事務局長

私は会員数・教区代議員の数を見てしまうのですが、四十五歳退会で存続が危ぶまれている教区が沢山出てきています。教区としてではなく地域として、例えば○教区と○教区合わせて二人の代議員…といった形はどうかなと考えています。

私が入会した時の四十代に私がなれているか？学習や人格の面で至っていない部分があり、今の若い方を見れば新しい着眼点もみられますが、昔の僧侶らしさが消えてきたようにも考えられます。

「コロナ禍」によって世界が一変した中、難しい運営を余儀なくされたお二人。お忙しい中、丁寧にお答え下さり、本当に有難うございました。

書籍紹介

涅槃会は、秋田県の大部分では三月十五日前後に合わせて旧暦で行なわれる。春彼岸と連続する地域も多く、〝春を告げる風物詩〟の感があるが、教義はあくまで釈尊の入滅を偲ぶ行持である。我々宗侶はこの時期『遺教経』を読誦するが、そこに至る釈尊最後の旅・そして後世に大きく展開した涅槃の思想を、どこまで知っているだろうか。それを学べる二冊を紹介したい。

中村元・訳『ブッダ最後の旅――大パリニッバーナ経』（岩波文庫）は、最晩年の釈尊の姿を平易な訳語で綴ったものである。インドの特徴である言葉の繰り返しも忠実に訳してある為、煩雑に感じる部分もあるが、肩肘を張らずに読み進められる。個人的には、河に橋をかけたり海を船で渡る人々を見た釈尊が〝聡明な人々は、すでに渡り終わっている〟と呟く場面が、謎めいて印象的であった。

平川彰『自在に生きる――涅槃経』（集英社「仏教を読む」シリーズ⑤）は、釈尊の入滅のみならず、大乗仏教において成立した『大般涅槃経』四十巻の要旨とその思想・教理を解説する。大乗では《釈尊は永遠の生命を得ており、真の意味での涅槃に入られたのではない》ととらえ、前世で経た激しい修行の数々を詳説する。遺教経にもある〝如来の法身、常に在して滅せざる〟の意味や、涅槃を構成する解脱・法身・般若の三徳も解説されるが、碩学の著者をして言わしめるほど難解であった。とはいえこの分野では数少ない良書で、特に最終章「永遠の世界としての涅槃」は必読である。

（佐々木耕志）

祈りのつどいオンライン

令和二年九月十六日、赤石基彦会長が住職を務める羽後町久昌寺を会場に、ユーチューブ生放送よる動画配信「**祈りのつどいオンライン**」を開催致しました。コロナ禍の中、撮影にも十分な対策と配慮をし、法要と撮影も必要最小限にて行いました。

オンラインによる生放送の動画配信は初の試みでしたが、多くの方にご視聴頂きました。撮影までの準備や当日のリハーサル等、貴重な経験となりました。この経験をもとに、今後起きるかもしれない現代社会の様々な問題にも対応しながら、祈りのつどいを開催してまいりたいと存じます。

（事務局次長　尾久雄人）

令和二年度「第一回随聞会」に参加して

第六教区　長泉寺副住職　戸澤広悦

十一月九日午後一時半より、令和二年度「第一回随聞会」が開催されました。コロナ禍の中、これからの秋曹青事業運営にあたり必要な試みとして、オンライン配信で開催するとの案内。参加諸師は「ズーム」で参加するという、随聞会初の試みでした。

講師として、**一般社団法人「未来の住職塾」塾長の松本紹圭師、同塾理事の遠藤卓也氏**に御講義頂きました。

研修としては三部構成。まず、松本師による「**お寺のミッション・ビジョン・バリューズ**」を持つことの大切さを学ぶ講義。次に、遠藤氏による「大阪府・法華宗法華寺の五か年計画」と題された、未来の住職塾に参加された御住職の御自坊の具体的な事例紹介。

それから、講義と事例紹介を踏まえた上で、「自坊のミッション・ビジョン・バリューズを考える」十五分の個人ワーク。その後四人ずつのグループに分かれての「ブレイクアウトセッション」―考えの発表と共有。最後に質疑応答でした。

今回はリモート講義ということでしたが、一堂に会して行われていた随聞会と変わらず、抵抗なく参加できました。松本師、遠藤氏の御講義の後、自坊の現在と未来を考える時間は、本当に有意義なものでした。自坊の存在理由・意義を考え、二十年～三十年後の自坊のビジョンを明確にすることは、コロナ禍における今のお寺の〝有りよう〟（葬儀の簡素化・御法事を行わない・御法事のキャンセル）への対策や改善にも通ずるように感じました。会員諸師の描くビジョンに共感し、自分のビジョンを深め、これから先の自坊を運営するうえで、行動指針となる原理原則を改めて考える、本当に良い機会となりました。

松本 紹圭 師

遠藤 卓也 氏

令和二年豪雨災害義援金

昨年七月の各地豪雨被害に関して、熊本県曹洞宗青年会様へボランティア活動支援・及び見舞金として三万円をボランティア基金より送金。山形県曹洞宗青年会様へも同様に、ボランティア支援金として三万円を送金致しました。

また昨年八月十日から二十日までのお盆期間中、県内会員各寺院に募金箱の設置を呼び掛け、義援金総額十八万三千五百二十一円を日本赤十字社・令和二年七月豪雨災害義援金口座へ送金致しました。

（会計　中村智信）

令和二年度「第二回随聞会」に参加して

第十一教区　長年寺副住職　松井祐司

去る一月二十五日、「**パンデミックや災害に揺るがないお寺像を描く**」というタイトルで、第二回随聞会がオンライン形式で開催されました。

始めに松本紹圭氏より「これからの僧侶に求められること」という内容でお話をいただきました。

弱い紐帯の強さ

データサイエンス・ネットワーク理論の世界では、私たちが何より大切に考えている家族や友人といった強いつながりは、かえって固まった考えになってしまい、視野が狭くなってしまうことがある。

逆にSNSやイベントの知り合いといった浅く広いグループと複数つながる方が、各グループからまったく違った情報が入ってくるため、視野も広くなり、意志決定も柔軟に行うことが出来る。

様々な意見を発信するグループと複数つながることの強さを学びました。

『コミュニティとしてのお寺のあり方』spiritual but not religious

精神的なことは大事だが、宗教には所属しない。

先祖や檀家でつながる〝先祖教〟ではなく、生き方や価値観としての仏道を求めている人が世界中で多くなってきている。

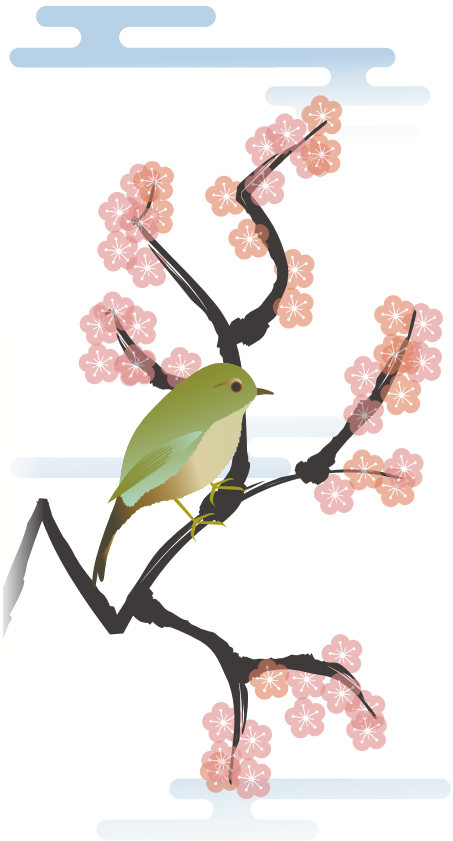
〝先祖教〟は死者中心の所属型コミュニティであり、仏道は生者中心の接続型コミュニティと言える。

〝先祖教〟は基本的につながりが菩提寺のみとなるが、仏道を求めている人は、曹洞宗の坐禅をしてみたいし浄土宗の法話も聞きたい、ということになる。

どんなつながりも良き縁として受け止めて、自分自身が他者にとっての良き縁となる、「弱い紐帯」の結び手としてのリーダーシップが、これからの僧侶・お寺に必要であると学びました。

次に、遠藤卓也氏より「コロナ禍における寺院・僧侶の取り組み」として、オンライン上で坐禅会やヨガなどを開催してつながりの場を作ったり、法要等を発信したり、逆にアナログコミュニケーションとして、全檀家に電話で安否連絡をしたお寺の取り組みなどを、写真を交えながら紹介をしていただきました。

これからのお寺を運営して行くにあたり、その時のニーズに添って行持や伝統を見直しながらも、本質は曲げずに、変えることと変えないことを見極め、再編集し、丁寧に何度も情報発信していくことが大切だとお話をいただきました。



住職学研修
「仏教・お寺の可能性ー両祖の教えに学ぶ」

【講師】
大本山永平寺
単頭　寿松木宏毅老師
大本山總持寺
単頭　柴田　康裕老師

三月九日、両本山の単頭老師を講師に迎え、令和二年度住職学研修が行われました。今回はコロナ禍ということでズームを利用してのオンライン研修となりました。

偶然お二人とも横手市の御住職です。そんなご縁もあり、両本山で修行僧の指導に当たるお二人から「**仏教・お寺の可能性ー両祖様の教えに学ぶ**」と題しご講義をいただきました。冒頭では、東日本大震災で亡くなった方々への黙祷が行われました。

講義の中で寿松木老師は、ありふれた事でも一生に一度きりで他の人にも代わってもらえない、そんな私たちだからこそ仏道に照らした姿勢や態度、「道心」が大切であると仰っていました。

柴田老師は、瑩山禅師の純真な求道心と、世俗との関わりを離れられない現実との葛藤の中でも、仏道を歩もう・広めようという志を忘れない姿勢の大切さ、また教えをしっかりと自分の血肉にする大切さを仰っていました。

またお二人とも「**衆生と共に**」・・・という姿勢が大切だと仰っていました。仏道を行ずることは独りよがりになってしまいそうですが、「私たちが坐禅できるのは、いろんなおかげで坐禅できる環境に身を置かせて頂いている・・・そんな謙虚な姿勢が大事だ」という柴田老師の言葉が印象的でした。

今回が今期最後の研修となりました。寺院や仏教の可能性について研鑽を積んできた今期でしたが、私たちの基本となるのは、釈尊や両祖の教えです。基本を再確認するような講義を、本山の単頭老師をお務めのお二人から、同時に拝聴させていただける貴重な機会となりました。

（事務局次長　尾久雄人）

大本山永平寺単頭　寿松木 宏毅 老師

大本山總持寺単頭　柴田 康裕 老師

東日本大震災 物故者慰霊・復興祈願法要

会長　赤石基彦

これまで秋曹青では、毎年三月十～十一日に被災三県にて慰霊・復興祈願法要に随喜して参りましたが、本年はコロナ禍のため自粛致しました。会としましては、三月十日に会長自坊において、全日本仏教青年会・全国曹洞宗青年会・世界仏教徒青年連盟共催「東日本大震災追悼慰霊・復興祈願オンライン法要」にズームにて随喜致しました。この法要への参加をもって、当会の慰霊・復興祈願法要と致しました。また、随喜人数を五名に制限し、間隔を空けて座るなど感染症予防対策を取り修行致しました。オンライン法要の模様はユーチューブにて全世界に配信されました。

当会は今後も被災地支援・ボランティア活動を継続して参りたく存じます。皆様から温かいご理解・ご協力を賜りますよう、何卒お願い申し上げます。

「五味五色」――縁をつなぐ《佛菓》

〝佛さまクッキー〟が発売された――ユニークな話を聞き、「大潟つくし苑」を訪れた。ここは社会福祉法人「南秋福祉会」が運営する《指定障害福祉サービス事業所》で、三十四名が作業やレクリエーションに通っている。開発に携わったのは**柴田和明師（二教区東泉寺副住職）**と**黒木淳祐副会長**である。

約十年前から、系列の事業所では希望者が東泉寺様の定例坐禅会に参加している。そこで柴田師は、理事から次のような話を聞いた――〝今より多くの重度障害者を受け入れる為、収益率の高い事業で自己資金を増やしたい。利用者に支払える工賃アップにもつながる。新しい商品を開発しなくては…〟柴田師は、以前小紙で紹介した《**月いちカフェ**》を共催する黒木副会長に声をかけた。昨年五月から開発に取りかかり、〝供物にふさわしく、食べても美味しく、縁もつながる〟クッキーに決定した。かつて洋菓子店で働いていた職員がレシピを作り、「五味五色」と名づけ、成道会の十二月八日に発売したのである。

「五味五色」には〝六〟種類の味がある。敢えて一種増やす事で関心が高まるし、宗門には「**三徳六味**」の教えもある。生地は混ぜた段階と成形した段階とで二度冷蔵庫で〝ねかせ〟、味にも焼き上がりにもこだわっている。真ん中には「種」に見立てたお米をあしらい、更にそれぞれの味に佛様を当て、絵と説明を〝おみくじ〟風に加えてある。南瓜（観音様、甘味黄色、慈しみの種）・ホウレン草（薬師様、苦味緑色、元気の種）・ゴマ（文殊様、旨味黒色、智慧の種）・苺（吉祥天、酸味赤色、幸せの種）・紫芋（お釈迦様、塩味紫色、安らぎの種）・山椒（不動明王、辛味白色、目覚めの種）――特に山椒はピリリとした味わいで、不動明王を当てたのが面白い。おみくじには《大吉祥》か《大々吉》のハンコが押され、ハズレがないのも嬉しい。佛様の絵は黒木副会長が担当し、塗り絵ミニ写佛用紙も封入した。愛らしく親しみやすいタッチで、幅広い年齢層に受け入れられる。題字は書家・ハンコは消しゴムハンコ作家等、柴田師の知り合いの強みが生かされ、〝商品開発は楽しかった〟という。商品化や企業との交渉では、公益財団法人「あきた企業活性化センター」内「よろず支援拠点」からアドバイスを受けた。

つくし苑の方々が一生懸命に作ったクッキーを宗門寺院が購入し、檀家さんにお裾分けし、お佛檀に供えられ、やがて下げられて《佛様の御菓子》として楽しく食べられる――幾重にも結ばれる佛縁を実感できる品だと思う。会員諸師にも是非お勧めしたい。

（佐々木耕志）

曹青秋田／第89号
発行／秋田県曹洞宗青年会
事務局／羽後町新町字上高寺99　龍泉寺内　発行責任者／赤石基彦　編集責任者／佐々木耕志
秋曹青ホームページ　http://www.sousei-akita.net/